

A Study of Terms on "Yakko-Haikai"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23266

「やっこはいかい」のことばの研究

——近世語研究（その一）——

深井一郎・中林啓子*

はじめに

この小論で採り上げる「やっこはいかい」なる用語には、二つの用法がある。一つは、一般的意味として「近世初期、江戸で流行した奴詞を用いて作られた俳諧。承応期にすでに文献に見え、江戸俳人の作が多いが、京の立圃のものなどもある。」¹⁾と解説される用法である。他は、特定書名を指すものとして「俳諧撰集。縦六寸三分・横四寸五分。可徳編。自序。定興奥書。寛文七年正月刊。うろこがたや板。『ゑ入清十郎ついでん』と角書がある。」²⁾と解説される用法である。ここでは、後者を含む前者の意味、すなわち、江戸前期の俳諧の一類型を指すものとして進める。「やっこはいかい（奴俳諧）」として知られている資料は、おおむね次のごとくである。

1. 「ゑ入清十郎追善 奴俳諧」³⁾寛文七年刊
2. 野々口立圃筆「集配戒」所収の「奴俳諧歌仙」⁴⁾承応二年
3. 卜養点「奴俳諧」⁵⁾一卷（ただし、頭部を欠く）
4. 岡本ヶ庵作 宗因点「奴俳諧」⁶⁾天和二年（淀屋ヶ庵宛宗因書簡を末尾に付す）
5. 卜養作「浮世歌仙俳諧」⁷⁾

奴俳諧は、当時かなり広く流行したものと考えられるが⁸⁾、おおむね散佚して、今日完全な形で伝わるのは、上記の数種にすぎない⁹⁾。

いま、上記数種にすぎない「やっこはいかい」を基礎資料として、その研究を進めたいと思うのであるが、元来、「やっこはいかい」の特色は、前記引用文中にも見られるごとく、その「奴詞」

にあるとされる。近世語における特色ある位相語¹⁰⁾として、つとに着目され考究が進められている。そこで、つぎに「奴詞」について若干記述しておこう。最新のものとして「国語学大辞典」の「奴ことば」の項をあげよう。

奴ことば 江戸時代初期、江戸の社会の一部で使われた特殊なことば。旗本奴・町奴などによって用いられた。〔起源〕旗本奴・町奴などいわゆるかぶき者が発生したのは寛永初年であるが、絶滅する貞享までの間、彼等は好んで裾の短い着物に、月代を剃らず、長刀をかんぬき差しにし、小唄を歌いつつ丹前風呂に遊び（『嬉遊笑覧』）、徒党を組んで博奕喧嘩など乱暴奇矯な振舞をし、特殊なことばを使った。そのことばをいう。〔内容〕柳亭種彦の『用捨箱』に「詞もなまぬるきを忌み、片言を好みていふ」とある。『足薪翁記』に「是れは山の手奴町奴などの専らつかひし詞にて、関東べいといふは此のことなり」とあるように、当時の関東方言を基礎にして、たとえば片言化したり（かたじけない→かたじけない）、音を省略したり（なみだ→なだ）、音を転化したり（事だ→こんだ）、接頭辞をつけたり（こぼす→ぶっこぼす）、独音化したり（うちかくる→ぶっかける）などして強く聞こえるようにしている。〔普及〕奴の風舂言語は当時特異な存在であったが、寛文ころから歌舞伎の世界にこれを利用するようになった。多門庄左衛門なる俳優が奴の風に扮し、出端の演技として奴ことばを使って名のつたのがはじめという。その風を六方、そのことばを六方ことばという。六方の語源は、奴に大小神祇組をはじめ六組あって総称して六方組といったからともいい、また彼等の差す大小の方向と振る手の方向が天地四方を指すからともいい、一定しない。また寛文ころ吉原の遊女の中で奴ことばを真似る者があった。それを吉原ことばという。馬琴の『元吉原の記』に『誰が袖の梅』（元禄十七年）の吉原ことばの記事を援用し「呼でこいといふ

ことを、よんできろ、急げをはやくうっぱしろ、いつてくるをいってこひ、ありくをあよびやれ」などを挙げ、かつその語例から「おさらばへ、のしけをささり、こはしやうし、さふさかふさは、おつかない哉」という歌を作っている。なお奴ことばを使って興行する俳諧を奴俳諧といい、正保・寛文のころ流行した。（真下 三郎担当）

なかなか簡明な解説である。とくに「奴詞」が「歌舞伎」と「俳諧」の両世界を通じて「普及した」と考えているところは首肯できるところであり、後にやゝ詳しく述べてみたいと考えている。また、「奴詞」の特徴として五点を列挙しているが、これについては、次のようなものもある。

国語学辞典（松井利彦担当）

1. 「つゝ飛ぶ」「ひっ違う」「つん漏る」「ぶん出る」などの接頭辞。
2. 「為さろ」「明けろ」などの命令形。
3. 「ない」「べい」「だ」などの助動詞。
4. 「さ」「もさ」「ちや」などの助詞。
5. 「あに（何）」「なだ（涙）」「こんだ（事だ）」などの訛を使用する。

国語史辞典（金田弘担当）

1. 「つんもる」「ぬるっこい」「ひっからっと」（奴俳諧）「おっ切る」（古今役者物語）「うるしいこんだ」（貝おほひ）などの促音・撥音化が幅広く見られること。
2. 「行列ほって（追ひ立て）」（松の葉）「うるしい（うれしい）」（貝おほひ）「せなかにうぶって（おぶって）」（雑兵物語）等の訛音・訛語の使用。
3. 「よくゆったもさ」「しきにゆい申せさ」「墨をひんなすっておくりやれちや」（奴俳諧）という助詞「もさ」「さ」「ちや」の使用は、「あけろ」「なさろ」などの命令形、助動詞「ない」「べい」「だ」の使用とも合わせて、典型的ではあるが、大体当時の東国方言を反映しているものと考えられる。

これら「奴詞」についての考察も、大きく言えば、広狭二様の見解が存するようにも考えられる。「やっこはいかい」のもつ近世語としての

性格を追究するなかで、「奴詞」の実態にも、後に眼を向けてみたいと考えている。

〔I〕俳諧と歌舞伎とに見る奴詞

この章では、「奴の出生とその風俗」「俳諧に見る奴と奴詞」「歌舞伎に見る奴詞」の三点を考えることにする。

〔I〕—（1）「奴」の出生とその風俗。

「やっこ（奴）」については、一般に次のような語義が考えられている。¹¹

1. 人に使用される身分の賤しい者。奴僕。また、下僕。家来。
2. 人をののしっていう語。
3. 江戸時代、武家の奴僕。日用の雑用のほか、行列の供先に立って、槍や挾箱などを持って振り歩く。髪を撥鬢に結び、鎌髭をはやし、冬でも袷一まいという独特な風俗をし、奴詞ということばを用い、義侠的な言行を誇った。中間。
4. 江戸時代の侠客、男だて。旗本奴・町奴と呼ばれ、武士や町人が、徒党を組み、派手な風俗をして俠氣を売り物にした。
5. 遊女などが、4の言動や気風を好むこと。またその遊女。
6. 京の神園会の際に、神輿の渡御に供奉した遊女。断髪で男装であったところからいう。
7. 江戸時代、江戸市中に散在した私娼。または武家方で不義をした女などで、捕われて、吉原の遊廓で一定期間遊女勤めをさせられた者。
8. 江戸時代、重罪人の妻子や関所破りの女などで、乞う者に下げ渡されてその奴婢となったり、獄中において雑役に従事したりした者。
9. 「やっこあたま①」（武家の奴、商家の丁雑などが結った髪型。月代を広く深く剃り込み、両鬢と後の項に残した毛とで髷を短く結ぶもの。糸びん）におなじ。
10. 「やっこあたま②」（江戸時代、幼児の髪置の時、左右の耳の上と頭の後部にだけ毛髪を残して他を剃ったもの。また、その毛髪。）におなじ。
11. 「やっこあたま③」の小児。また、ひろく幼少の者を卑しめていう場合もある。

12. 「やっこしまだ」（元服前の十三歳から十七歳までの女の子の結った烏田髷の一種。江戸中期から明治初期にかけて流行した。前髪に赤い布をかけるのが特色。）の略。
13. 「やっこだこ（奴胤）」の略。
14. 「やっこどうぶ（奴豆腐）」の略。
15. 「こじょく（小職）①」（見習いの弟子の意。娼家で雑用をする女兒。下地っ子。禿。または、子どもを卑しめていう語。）に同じ。
16. 「たいこもち①」（遊客に従って、その機嫌を取り、酒興を助けることを職業とする男。太鼓衆。男芸者。ほうかん。）の異称。
17. 二五〇をいう、魚屋などの符牒。
18. 男色をいう、盗人仲間の隠語。

この中、いま問題にすべきものは、3・4であると見てよいであろう。両者は本来異なる実体を持つものと考えられるが、場合によっては（典型化の過程を経た場合などは）共通の性格をもつものとして考えなければならないこともある。

まず、「徳川禁令考」に見える次の記載に注目しよう。

元和元卯年五月十五日條々

- 一、大びたいの事
- 一、大なでつけ大すりつけの事
- 一、下髭をき候もの事
- 一、大刀さし候もの事
- 一、長脇指候もの事
- 一、朱ざやし候もの事
- 一、大つば大角鏝さし候もの事

右七ヶ條相脊於之ハ其身は籠舎（下略）

この記述と、寛永十三年成立の「可笑記」に存する次の記載とは、おそらく同様に「奴」についてのものであると考えてよいであろう。

此ごろの町人共をみるに、皆侍を学び、二尺あまりの大わきざし、三尺あまりの大がたな、てりかぶやくばかりのたてごしらへ、真十文字にさしはしらし、男道の心がけ、しやうし千萬なり。（下略）

元和——寛永という早い時期に、すでに「奴」の存在を見るわけであるが、これらが、二十数

年のち¹²の「旗本奴・町奴」と同じ仲間であると考えよりは、前述辞典項目の（3）に該当するものが、やや先行し、（4）に当たるものが後続すると考えるのが妥当のようである。元和——寛永（1615—1643）という時代は、なお我国の武張った気風が存する中で、多量の牢人が排出され、盗賊の横行などもあって、とくに江戸の街は不穏な空気を存していた。¹³一方、参勤交代を強いられた諸国大名や、儀式・登城に際しては正規の供揃えを要求された旗本たちにとって、恒常的に任国や屋敷にこれら下僕・奴侍を雇いおくことは、次第に経済的に不可能となり始め、江戸近郷の農家の次男三男や、二代にわたる牢人たちの中から、これらの下級武士或は奴僕を雇い入れるようになり、さらには、特定の日限を切って使用する奴僕をすら生ずるに至った。このような情勢の中で、前述の如き初期の「奴」が出生し始めたと考えてよいであろう。さらに、ようやく上方・伊勢を中心に江戸に流入した商家が定着し、人口の膨張・公營土木事業の拡大などで富の蓄積が進むにつれて、未だに不安定な治安に乗じて盗賊の横行もはげしく、富有な町家にとっては、自衛手段を構えなければならない状況を生み出した。これが「町奴」の発生の原因であろう。一方では、領地のない知行とりの旗本にとっては、禄高どおりの生活は、江戸の街が富み、貨幣経済の実態に移るに従って、台所は窮乏し、とくに、家督をつぐことのできない次男・三男は、俗に云う「飼い殺し」の「部屋住み」を余儀なくされた。この経済的逼迫と、定職のない鬱積、格式名譽のみが存し実質の伴わない諸矛盾の中で、奇警な服装・言動を好み、喧嘩三昧の「旗本奴」が生まれたと見てよいであろう。

ついで、古く見られる「奴」の叙述に目を移すことにしよう。まず、萬治二年（1659）の「百物語」¹⁴に次のような記述がある。

- ④ 「山もとのやっこ、山椒を買ひけるに、商人色々取
いだし見せけれ共、何れもからくはなしとてくひら
しければ、売手はらをたて、おみは人をなぶるか、此
山椒からくなくば一斤ふるまふといふ、やっこく

ふて見せんとてひた物くひければ、なにかはたまるべき、むせりけるが、ものもいひえずはしりてかへりにし、道にてふと思ひ出でけるは、山椒にむせては、あかがねにかぶりつきてなをるとや、あかがねがほしと思ふ所へ、あたまのきんかんなる人來りければ、やくはんうりと心得て、かのきんかんあたまへ、ほかとくひつく、此人はらをたて、にくきやつとて、ひしとつかまへける、やっこ申けるは、我ら山椒にむせ、あかがねと存じ、かくのしあわせ、御ゆるしあれといへ共きかず、一腰に手をかけ、ちまなこになる、町衆あつかひけるは、御かんにんあれ、にくき事ながら、ゑやうぐいにてもなし、くすりぐひにて候まゝ、御かんにん有るべしと、ロ々にいひければ、どつとわらひてさりぬ」（下巻、四）

- ㊦ 「或人の語りしは、あづまのやっこを見侍しが、をとに聞きしに十ばいせり、其たけ六尺あまりのおとこ、大ひげをねじあげ、まつはだには牛首布のかたびらき、上にはふとぬののしぶぞめに、七八百がのりをかい、馬のかわのふと帯しつかとしめ、くまの皮の長ばをり、まつすぐなる大小十もんじにさしこなしたるけしき、身の毛もよだつばかりに候ひしが、去人に名を問ければ、鍵籠兵衛と語りける、さてもめづらしき名みやうじと、其由来をきけば、ある時がん兵衛、大名とけんくわをして、敵の大ぜいなるを打やぶり、あまっさへ敵の鍵をうばい取しにより、鍵と名字つきしとなり、又籠兵衛といふ名は、かゝるたけきやっこなれば、はや死して籠に乗たる心とて、籠兵衛と名づけると語りける」（下巻、五十）

上記㊦が武家の奴僕であり、㊦が旗本奴か町奴かの何れかであろうことは、直ちに理解できるであろう。同じように、武家の「奴」について「昔々物語」¹⁵に、次の如く記されている。「歴々の奴、身持食物ふやけたるなま和らか成体なし。好色の事も、なづみくったくの気味なく、刀脇差やき刃の強を好み、侍道の勇氣専らとし、人に頼れ又は人の為に命を露ほどもいとわず……」

また、曳尾庵南竹の「我衣」¹⁶には、次のように記されている。

「町人といへども武扁を立、辻切喧嘩處々にあり。此節大小の神祇組とて若手の御旗本町人といへども、一つに組合、何百人と云事を不知。又白柄組（吉弥組と云）風俗は、髪を手一束に切、たぶさ取れぬ用心し、冬紺縮緬白大縮入一つ、帯も白く三重に廻し、袖口白太くくゝり、丈は三重の少し下へ下るほどに短く、（鉛

三匁づつつけこみ、つまのはねかへるをよしとす）長き大小を帯し、柄糸下緒何れも白し」

ついで、柳亭種彦の「用捨箱」¹⁷に、次の如く記されている。

「昔奴ととなへしは、男達の事なり、故に当時は寛潤の字をやつこと訓ず、或は六方者といふ、事は昔々物語にも出て、人の知るところなり、詞もなまぬるきを忌み、片言を好みていふ」

「その様をかぶきに似せ、小袖のゆきいと短く、無反の要刀もつとも長きを門にさしこらし、手を振て動き出、彼六方詞、名のり詞なんといふを演て後、狂言にかかるが、並て当時の風なり、」

また、「武江年表」¹⁸の承応三年の條に、つぎのようにある。

「今年町奴御穿鑿あり、夢の市郎兵衛、唐犬権兵衛などいへる男伊達と号せし悪党の事なり、六方組などゝ号して、市中をはいくわいし喧嘩を仕かけ、諸人の妨せしもの也、六方組・六方言葉の事、醒世翁の奇跡考、柳亭翁の用捨箱等を見て、其趣をしるべし、この男伊達の内、山中源左衛門といふもの、正徳年中糺町真法寺にて腹切し時 辞世 わんざくれ ふんばるべいか けふばかり、あすはからすが かつかじるべい、これ則六方言葉也、この時の町奴の名三十四人 談海に見えたり」

さらに、「江戸名所図絵」¹⁹巻一に、「丹前風呂」についての記述がある。

「丹前殿前、雄子町の北の通りを云ふ、昔此地に堀丹後守殿の邸宅ありし故にしか唱へけるとぞ、其頃此辺の風呂屋に湯女を置いて客を招きしにより又六方組とて武夫にもあらぬ壯年の俠夫、大小立髪の異風なる出立にて此風呂屋の辺を徘徊せしかば、是を丹前六法風と呼ける。所謂六法とは、神祇組、鶴鶴組、白柄組、鐵棒組、唐犬組、箆籠組等なり」

以上、解説を加えるまでもなく、武家の奴僕や、旗本奴・町奴の、風躰・言動のおおよそは理解できよう。当時の社会にあって、彼等の在り様が、その出生と相まって、どのようなものであったかについて、文献の示すところを追って来たのである。

〔I〕一（2）俳諧に見る「奴」と「奴詞」

江戸初期の、牢人の充満と町人の旺盛な気力

との混在する不安定な世情から生まれた一現象として理解される「やっこ」の存在は、「巷に喧嘩買と称する珍奇な職が生れたり、然諾を重んじて義に逸る男達の徒が横行したりする」¹⁷世相の一典型でもあったのである。この「やっこ」たちが、戦乱の遺風の中に生まれ、その理念を剛気と任侠におき、無反の長刀やねじり髭に異風を誇示し、人の耳目を驚かす特殊な言葉を弄することに専念することによって、己れの存在を世に誇示し、世間もこれに対し眼を見はり、話題としてもはやした¹⁸であろうことは、想像に難くない。このことは、当時の流行としてはげしい変転を見せた「俳諧」と「歌舞伎」の世界に、顕著に見られるところである。ここにまず、「俳諧」の世界をながめて見ることにしたい。

当時の貞門俳諧は、俳諧を連歌から区別するために「俳言」を重視した。しかし、当時の巨匠たちは、「一面俗言を以て俳諧の生命とし、連歌と区別する尺繩としながら、一方に、餘りにも卑近に過ぎ、歴史的背景のない語は、之を排しようとする不文律を持ってゐたらしい。」¹⁹この貞門の重鎮貞徳の死後、宗因の談林が興隆するまでの期間が、いわば、新しい模索の時代であり、伝統に捉われるより、奇抜さを求めることが大胆に行なわれえた時代でもあったと考えられる。このような俳諧史的意義から見ても、此時期の世相に大きくアピールした「やっこ」の存在が、内容・素材として、また表現上「奴詞」として、俳諧の中に取り入れられても、決しておかしくはない。「奴俳諧の催しが頻繁であった——殊に江戸に於て——ことは、後世の随筆類に俟つまでもなく、伊賀上野のやうな上方の小都会に於てすら、之に係はりを持つ『貝おほひ』の一書が撰ばれてゐる事から、容易に推察出来ようかと思ふ。」²⁰という考えは、当を得たものと言えるようである。寛文以後の出版書目を集録した「江戸時代 書林出版書籍目録集成」²¹に、次の各項が見られる。

○寛文十年(1670)「俳諧書」の項に

「一冊 やっこ俳諧」

○寛文十一年「俳諧書」の項に

「やっこ俳諧 一」

○延宝三年(1675)「俳諧書」の項に

「一 やっこ俳諧」

○貞亨二年(1685)「俳諧書」の項に

「一 やっこ俳諧」

○元禄五年(1692)「俳諧書」の項に

「一 やっこ俳諧 作者不知」

○延宝三年「仮名」の項に

「一 俳諧 奴子」

○天和元年(1681)「仮名」の項に

「一 俳諧 奴子 老奴」

○元禄五年「俳諧書」の項に

「一 六方俳諧 江戸可徳」

これらは、すべて内容を異にするものかどうかについて、全く不明である。或は何種類かは全く同版の後刷りが繰り返されたものかも知れない。ただ、これらの総てが現在存在しないのではないかと思われる。少なくとも存在が知られていない。単に目録の形から見るだけであるから、確かなことは言えないが、最少に見ても3～4種のものが出版されたと考えてよいであろう。これに加えて、現存する寛文七年のものが、この出版目録には記載されていないのである。これも不可解なことと言わねばならないであろう。以下、現在する「奴俳諧」および類書について一見してみよう。

〔一〕 天理図書館蔵「集配戒」一冊。²²野々口立圃筆。縦23.2cm、横10.5cmの折本。上下に界線を有し、界線の内部は20.4cmあり、之を等分に切った横罫と、縦に五等分した縦罫を有する。内容は、「瀟湘の夜るハ物かハ花の雨」に始まる百韻、「水辺を付離れたる軒哉」に始まる百韻、「奴俳諧哥仙」と題し序文を有する歌仙、「山ハ屏風折にふりたる雪見哉」に始まる百韻、「恋俵戒」と題し「花て候お名をハえ申舞の袖」に始まる百韻、「一本の中てなむしや花の兄」で始まり、七十句で途切れた百韻と覚しきもので成り立っている。

〔二〕天理図書館蔵「浮世歌仙俳諧独吟」ⁱⁱ²³古俳諧書留」の中に収められており、ト養作と記されている。「松か枝にまかせてをける藤かつら」にはじまる三十六句であり、末尾に「もとよりもへたのわたくし俳諧を一句一句に見たくこさなひ」の狂歌を載せている。別に「高野山俳諧書留」にも「当世奴子俳諧」と題して収められており、本文にかなりの異同があり、奥に「右両吟 老人ハト養 一人ハ□□」と記されている由ⁱⁱ²⁴であるが、未見である。制作年代は不明であるが、ト養作とすれば、寛文～延宝の間であろう。

〔三〕「入 清十郎ついぜん やっこはいかい」一冊ⁱⁱ²⁵東京大学函竹文庫蔵。うろこかたや新板、寛文七年正月刊。可徳の独吟百韻を定興が判したものである。初めに可徳の序、終りに定興の跋が付けられ、最後に「よい作に墨をにじるはあしびきの山の手からなやっこ俳諧」の狂歌一首がある。刊行された版本としては、現存する唯一の「奴俳諧」である。それも、唯一本存する貴重な存在である。ために、「奴俳諧」といえば、此書を指すようにさえ考えられるに至ったのであろう。

〔四〕天理図書館蔵「ト養筆 やっこはいかい」一卷ⁱⁱ²⁶。この卷子本は、初めの部分を欠いており、さらに、上記〔三〕の版本と同じに近いものであるが、序・跋を欠き、48・50・69・84の四句を脱し、その個所に「此前句書落し申候か」のような文言を書き加えている。また判詞についても、版本のそれに対して、たとえば、45・49・72・75などの判詞を脱し、反対に、66・95・98などの判詞が付け加えられているのである。〔三〕と〔四〕との関係については、荻野・森川両氏に考説があるが、私見としては、〔四〕は〔三〕に先立つものであり、〔三〕の板下或は原本に近いものを、短時日に書き留めたものを、ト養が写し取ったものかと考える。筆跡は彼のものと考えられ、筆勢は必しも丁寧ではなく手控え風に見られる。四カ所に見られる「此前句書落し申候か」のような註記は、筆写

の際に前後関係の続きのおかしさに気付いた（それだけの俳諧力量が筆者に存しなければならぬ）ために書き入れられたものであると判断できる。もし、このように考えるならば、両書の異同は極めて重要な意味を持ってくることになる。この点については後に再考したい。

〔五〕天理図書館蔵「岡本ヶ庵作 独吟歌仙」ⁱⁱ²⁷一卷。末尾に宗因筆岡本ヶ庵宛書簡が付いている。「昨日爰一卷致拜見候。初而之御作意と被仰候、天性萬事に通し候哉とおとろき存候。東国之やつこ詞おほく、不案内にてさしをき候事共、御作無残心に可思召と存候。其旨被仰可被下候。恐惶謹言」とあるが、実際の歌仙の中には、上方俗語が散見する程度で、典型的な「奴詞」と見られるものはないようである。上方の大阪で「奴詞」と名乗って沙汰されたところに意義を認めるものである。岡本ヶ庵は、岡本重当（元禄十年四月波）であるとする森川氏の考説は当をえていると考えられる。ただ、宗因書簡に見える「一卷」が、前に存する歌仙を意味するかどうかは即断しかねる点もないではないようである。

〔六〕 その他の「やっこはいかい」

（1）万治二年「百物語」所収のもの。同書第24話に、次のようにある。作者未詳。

近頃やつこはいかいとて、人のしけるを聞しに、冬の事なりしに、

鬢水にあたまかっぱる氷かな

といふ句に、又附ける

しやつつらさむき雪のあけぼの

（2）柳亭筆記巻四、熊谷笠の項に引用するもの。

〔奴俳諧〕（寛文七年和算イ=知算独吟、昨夢判）
くらくてづんと見えぬ顔ばせ

たそがれにくまがへかごをひっかぶり

判の詞、日かげものと見えたな、しやつつらをむきだせ

柳亭云、熊野笠と熊谷籠といふが奴詞なり種彦書入本の「貝おほひ」十番判詞「ひっぴけうんのめ」の註として『寛文七年知算独吟・

奴俳諧 発句 ひっぴけさねを三味線の糸桜』
と見える「奴俳諧」と同一のものかと考えられる。²⁸

(3)「柳亭種彦蔵俳書目録」(水谷不倒編「明治大正古書価之研究」所収)に次の記事がある。²⁸

古写本 一冊 野良俳諧 奴俳諧等異体の俳諧合本、明暦ヨリ寛文ノ頃マデ混雑、判ノ詞大方未得ニテ江戸俳諧也。

〔七〕 他に関係深きもの。

(1)「貝おほひ」芭蕉の江戸における処女作である。「はやりことばのひとくせあるを種としていひ捨られし句どもをあつめ」と序にあるごとく、従来、流行詞・小唄の文句を判詞に用いたと喧伝されているが例えば、「まかせておけろ、うるしいこんだ、くんのむ、うんのめ」などの、いわゆる「奴詞」も、句の中や判詞に散見する。類書の一つと考えてよいであろう。

(2) 六方言葉関係。

ここでは書名等を列記するにとどめる。

- 吉原六方(寛文初期)
- 六方こと葉(かわりなのりことは・六ほうこと葉・みやこ六ほう)(延宝初期)
- 古今役者物語(谷中六方)(延宝六年)
- 古今四場居色競百人一首(元禄六年)
- 大福帳のせりふ(正徳四年)
- うらう売のせりふ(享保三年)
- 男伊達初買曾我(宝暦三年)

(3) 狂歌・小唄関係。

狂歌では、とりあえず「ト養狂歌集」の中から、いくつかの例をあげておこう。

うち出る月は世界のでつほうず

たまのやうにて雲をつんぬく

やっこ衆の名もさな名もさしは垣と

ゆいたてられてうつゝなのみや

老が身のさむぎしらかの霜はらひ

ゆるさせづきんひつかぶろとの

湯治土産に木地の三組のちうばこを給はり

かたちに申つれたりぬりてつかへとありけ

れば当世はやりことばにてよめる

たまはりし木地重箱の三ツ組は

うるしいうるしいかたちうけない

また「武江年表」に、承応三年、町奴山中源左衛門が自決の折、辞世の句として、

わんざくれふんばるべいかけふばかり

あすはからすがかつかじるべい

とあると記している。

小唄の面では、「松の葉」「松の落葉」からそれぞれ例をあげるにとどめよう。

「松の葉」三、「槍をどり」³⁰

振りやれおふりやれ大鳥毛の振袖、行列ぼつたてあづま入り、ちとちとちと歩行をめされの、しつかとせ、槍はちょんちょん、ちょろちょん女ろさまに持たせろ、まつかせ持たせろ、まつかせまかせ、まかせまかせておけろの、さてさてな、任せて置けるの、〈中略〉花のお江戸にとんとんとつ着いた、はや品川をうち過ぎて、東をさしてぞくだりける。

外に「丹前清玄」「寛濶一休」「草摺曳」などに、それらしい用語が散見する。

「松の落葉」四、「山之手奴踊」³¹

〈略〉どっこい三ヶ国の伽羅よなどつこいな、〈中略〉堅から見ても横から見ても、はつてよい男え、おさき一番手の奴、上髭、ひんとした、しやんとした、つりりん、つりりん、つりりん髭のなが刀、それ八文字うから浮かれて、後からうかうかうか、うから浮かれて、後からうかうかうか、徒歩ふる手を振る伊達を振る、爰は山の手のよいよい奴の出所。

外に「上る御せんやりをどり」「しててん奴踊」「さうだんべい」「公時酒の酔」などに同様の用語例などが見られる。

以上、俳諧の世界における「奴もの」を見てきたのであるが、一時期を限ってではあるが、盛行・汎濫と言いうる状況であったようである。ただ、この盛行が江戸中期を境に消え去り、現存する資料が極めて些少であることは、何を意味するのであろうか。荻野氏は、奴俳諧が正統なものでなかったことと、後世には怪奇なものと思われ疎んぜられたことを理由にあげておられる。妥当な見解であるが、さらに付け加え

るならば、「奴風俗」も「奴詞」も実社会での存在は短期間の流行でしかありえなかったことが最大の原因であろう。新奇を求め、斬新をねらった趣向は、所詮長くは続かないものである。江戸中期以降にも、「奴風俗」や「奴詞」が「俳諧」の世界に見られるが、既に一つの型と考えられ、取り上げられる態のものではない。

〔1〕—（3）歌舞伎に見る「奴」と「奴詞」

歌舞伎については「野槌」（元和五年板）¹³²に「近年出雲の巫京に来て、僧衣を着て鉦をうち佛号を唱へて、始は念佛おどりといひしに、その後男の装束して、刀を横たへ歌舞す、俗に歌舞妓と名づく」と見える。慶長年間の種々の記録類に「かぶき」が見えるが、いずれも女歌舞伎である。加賀の「三壺聞書」¹³³に「去る元和の初より……御前様、御若君様達の御慰とて、数ヶ所の芝居を、浅野川、才川、両所に立て並べ、あやとり（操）、かぶき、品々見物有、折々登城仕り、御城にて仕りければ、……其中に、才川口、鬼川の縁に女歌舞姫の座あり、太夫にはお吉、塩かま、十五夜とて三人の女有、皆人是に異名を付、楊貴妃、李夫人、勾当の内侍と申けり、其外十六七、二十ばかりの女共三十人有之、兵庫わげに前髪を置、朱かいらきの大小に、金銀すかしの鍔、真紅下緒、印籠巾着をさげさせ、根本者女なれば、出立はいつも若衆の出達にて、様々のをどりに狂言を交え、天下無双の猿若にて随分おもしろかりければ……」とあり、当時の加洲金府の状況がよく分かる。また、「寛永十六年称宜町に芝居ありし時の古図を見るに、芸をなす場のみ板を葺て四方は竹矢来を引廻し、中に藁を覆ひ、見物所は土間にて藁を敷て見物せし体也。棧敷はなし。屋上はよし簀の上をむしろのをせ、小雨くらゐの時は興行せり。舞台は板を横にならべ、正面に高き処有て爰に唄ひ鳴物師等居並び、此前にて役者所作を演ず。尤一切にて打出し、此時小太鼓を左に持ち、右の手に撥を持って舞台の鼻へ出て入替りの

旨を述べ、跡は何の所作致候と披露す。¹³⁴」とあるによって、当時の芸居小屋の状況が分明しょう。以下、「歌舞伎年表」の記事の中から、所要のものを抜き書きしてみよう。

◇正保元年、山村座にて中村数馬「丹前六法」の狂言の事より、看物人の内きおひ組同士にて口論と成り、小佛小左衛門といへるもの牢舎申付らる。

◇寛文二年、五月三日堺町古伝内芝居狂言付に「地獄奴」「風呂屋奴」「茶の湯丹前」の曲目がある。八月十八日堺町狂言付に「追善曾我」「茶湯丹前」。九月二五日堺町番付に「町奴」。

◇寛文三年、正月七日堺町吹矢町狂言付に「さんや奴」。四月廿一日古へ都伝内座の番付に「奴道心」「きよたけ奴」。四月廿四日松平大和守方へ狂言師呼ぶ「祇園奴」「日待奴」

◇寛文四年、水野十郎左衛門切腹を命ぜられる。「吉原より帰り三浦小二郎同道にて上藤の小袖下に着し、いにしへ伝内東屋へ被参候。大あばれにて、揚幕切て落しさまさま六方、上へ聞候。其上法順内小わたと云上藤つれて走り、段々不屈、御吟味にて松平淡路殿にも切腹被仰附。」（一話一言、44）

本年の芝居絵巻を「中村座沿革誌」「歌舞音楽略史」に転載す。△「谷中やっこ」といふ掛札あり。通行武士三人に自分の股くぐらす人。橋掛りに六方の武士、若衆を連れし處。

◇寛文五年、十一月堺町坂東又九郎座番組に「奴紅葉狩」。

◇寛文六年、八月八日堺町の番附に「谷中奴」。

◇寛文七年、正月又九郎座に「聾人奴」。二月松平大和守、新芝居の狂言師を召す。「小田原六方」「奴だんりん」¹³⁵。三月堺町坂東又九郎座の番附に「ゑびす俳諧」「やっこはいかい」（多門庄左衛門、ゆきゑ、武兵衛）。四月同座の番附に「ゑびす俳諧」「奴歌枕」「八間茶屋」¹³⁶。五月七日松平大和守、堺町の役者を呼ぶ。「奴聾」（多門庄左衛門、喜九郎、九郎三郎、武兵衛、藤十郎、久内）「日待奴」（不残役者出）

◇寛文八年、十二月松平大和守邸にて「清水奴」

- ◇寛文十年，正月市村竹之丞座にて「うつせみ奴」。鶴屋勘三郎座にて「東やっこ」。玉川主膳座にて「やっこ花の宴」（内記，多門庄左衛門）
- ◇寛文十一年，七月松平大和守邸にて「入間川」「花段落文」³⁷「日待奴」
- ◇延宝元年，十一月松平邸へ木挽町役者を召す。「六方 鎌倉物語」「夢の盃」³⁸
- ◇延宝二年，正月大和守邸にて狂言番組「風呂奴」。
- ◇延宝三年，九月大和守邸にて狂言「奴子つきのさんたん」。
- ◇延宝四年，五月大和守邸にて，「気儘六方」
- ◇延宝五年，八月前嶋次郎兵衛子供狂言芝居，「風呂奴」（ぬめりあり，とんよ踊）。十月同子供狂言「鎌倉やっこ」。
- ◇延宝六年，三月大和守邸にて「うかれ六方」。竹之丞座に「多門庄左衛門 谷中六方」。
- ◇延宝七年，八月大和守邸にて狂言「吉原檀林」（夕霧，相手浪人，殿，小さらし遣手，家老，出入町人，外立役二人）。
- ◇延宝八年，四月大和守邸にて「有馬奴」。
- ◇貞享三年，三月市村座にて「丹前姿鏡」生嶋新五郎，村山平十郎，中村七三郎丹前踊。大入大当。
- ◇元禄元年，二月長州侯の邸にて勘弥座の役者狂言。「うかれ丹前」。三月中村座「奴朝日奈大磯道」。
- ◇元禄十年，五月中村座「兵根元曾我」正月中村座「大福帳 参会名護屋」。十一月山村座「若衆丹前供奴」。
- 以上は，すべて江戸におけるものである。一方，上方方面において，此種のもの数は多くは見られない。わずかに次のようなものがある。
- ◇萬治三年，七月版「万歳躍」に四條河原のさまを次のように記す。
- 「四條河原を見物に罷ったりや，当世の出来物があまたござる。虎屋が今川，花見道心は与五郎が得物，宮内が佐々木問答，藤八が当話，左内が松風に，フントクが道化，さてその後は

村山が座には，千之丞が舞の手に，しなだれかかる藤村半太夫は神代の昔より古今無双の美少年とて世間から推さゝんす，奴作兵衛が奴の言葉，五兵衛が弁舌，又九郎が道化，藤内がしやも，木やりは伝兵衛，恵比寿屋吉郎兵衛世継の小太夫は鳴の千歳，和歌の前も物かはの舞姿」云々。

◇寛文十年，「西鶴大鑑」に，「一とせ難波の芝居にて恋の奴のあばれしより，歌舞妓といふ事法度になり，太夫子残らず前髪おろして野郎になりし時は」云々。

やはり，「奴」にかかわる歌舞伎は，それが踊りであったり，物真似であったり，狂言となったものであったりしたのであろうが，江戸に花咲いたものであることは疑いを入れないところであろう。しかも，寛文・延宝年間に集中しているところは，明らかに「流行」と見てさしつかえないであろう。物見高いは江戸の風俗とは云え，この氾濫は，やはり異常と見てよいであろう。さらに，歌舞伎の世界では「評判記」の盛行も見逃せない。「歌舞伎年表」に見られた上演曲目は，仲々にその実体が分明しない。これに反して「評判記」の方は，実体そのものではないにしても，また，多分に誇張が存するにしても，架空のものや，虚偽のものは，確かな観客の眼を意識すれば，やはり存在しえなかったと考えるならば，或程度正しき姿を伝えているものと考えてよいであろう。いま，「奴詞」の使用の頻繁なものを中心に若干とりあげてみよう。

◇野郎虫（万治三年）³⁹

随分のやっこなり。

いらぬやっこの長がたなかな。

扱もかたじうけないおなさけかな。

きみをみるめはあんとすべいさ。

◇剝野老（寛文二年）⁴⁰

おもひそめつけの茶碗のかたしふけなひ，

ふりのいとしかたしうけなさ。

あはよくいふたでは有ぞ。

山の手の隸（やっこ）も悲に堪たり。

◇野郎大佛師（寛文七年）⁴¹

かの二かいからつんだいたくわびらあしよりも、なをでっかいちがひぞかし。

あゝよくゆったではある。

かたじふけなけれ。

恋のやく神にとつつかれて、

今にまだ、いとうつきりと よいお子だ、

ゆふにやさしき 君じやなもさ。

なだがこぼれ、

とかふいふもでぞこなひだんべいも、

ぜひないこんだ。

ゆくゆくお江戸の六ほうになれたまはば、

かうもり羽織しやんとぶつかけて、

わつちめごときの小ぜきれいの、

びやくびやくあるこんじやなひ。

あんだ物のかずならず、

舌をまひてすぎるべい。

うるすいうるすいかたじうけなひ。

むねにあわなひ事もあんべけれど、

ぜひなひこんだとおもつたがよひ。

◇新野郎花垣（延宝二年）¹⁴²

おながれをくんのめさはげ、

◇役者評判蜘蛛（延宝二年）¹⁴³

見つたくないとて茶わむを手にもとらなんだは。

いやましのなんだひげをうるをし侍る。

見いだしたるまなこに、かどをたてゝ、ひと

ねちねちたるいきとをりには、おんまけさん

だせ、あんだ見つたくない。たあたなでぎり

とでた熊谷山の手やつころさも、

◇野良三座記（貞享元年）¹⁴⁴

しやみせんのめいじん、せじやうにほまれと

りはけて、たんぜんやっこのじやうずなり。

〔II〕 「奴詞」の位相と実態

この章では、「奴詞」の位相について、芸能としての典型化の問題と、その実態を当時の江戸の俗語や関東方言との関係の中において、明らかにしたいと考えている。

〔II〕 — (1) 「奴詞」の位相について

奴俳諧と奴歌舞伎とを併せて考察する中で、「奴詞」を見てゆくことにするが、まず「奴」の存在が前提となるであろう。前述したごとく、武家の奴僕と、旗本奴・町奴など男伊達との間に差違が存すると同時に、両者の共通部分も存するところである。武家の奴僕が、登城の供揃えや日常仕丁の役のみにあるのではなく、旗本や大名の仲間部屋が博奕の場となったり、また、彼等の斡旋をした口入稼業が、町奴であったりもしたであろう。旗本奴も町奴も、その頭だっ者の出自は先に述べたところであるが、彼等を支えた徒党たちや、それを補給する予備軍的存在として、大名・旗本の仲間小者が存したと考えることは、大むね間違っていないと思われる。これら武家の奴僕としての「やっこ」は、すでに父子二代にわたる浪人暮らしの者もあれば、江戸近郷の農村出身の次三男、さらには関東一円の郷土や農村出身の次三男によって構成されたであろうと考えられる。彼等を中心とした日常語やその生活は、上方から移入された文化や町家の日常、各封地から移住した大名家族郎等たちの生活などとは、おそらくかけ離れた質素貧弱なものであり、社会の上層に浮び出ようもない態のものであったに違いないと考えられる。ずっと後代、いわゆる江戸語を基礎に花開く江戸文化の担い手の一つとしては、十分に考えられなければならないであろう。しかし、寛文・延宝といった江戸初期の頃には、一般的に見れば確実に下積みの色あせた存在であったであろうと考えられる。

これに対して、旗本奴・町奴は、その出生についてはすでに述べたところである。戦国の殺伐な気風が未だに残る中に、新興都市としての潑刺とした活気が溢れ、武張った気骨と、人目を引く風体が、江戸の街の人気を博したことは、充分に首肯できることである。ようやく太平の世の礎が築かれた江戸にあって、景気を刺戟する街づくりの工事は、多量の人夫を必要とし

た。これら人夫の口入稼業としては、荒くれ男共を制御するだけの器量人が要求された。町奴の登場は当然の帰結とも云えよう。一方、直参旗本にとって、鳥原の乱以後の太平の世にあっては、家を守り抜くか、学問・経世の道で登用されるかしか途はなく、とくに旗本の次三男は部屋住の身として、生涯買い殺しの運命にあった。彼等が不満鬱憤を晴らすために、奇行に走り、博奕に耽ったとしても、一面やむをえぬ仕儀であったとも言えようか。ともあれ、これら旗本奴・町奴ともに、喧嘩、奇行、風躰等によって自己顯示することによって、存在を社会にしらしめ、不満を晴らし、引いては世に処する途ともするに至ったと見られる。この「男伊達」が世評かまびすしく取沙汰されたことは、すでに見て来たところであり、その横行は寛文・延宝の頃の流行とされる。この当時の社会にあって、実際に存し生活していた「奴たち」の有り様を、ありのままに記したものが存すれば、それは忠実な記録として評価されよう。たとえば、彼等の用いた「奴詞」について、それが彼等の特殊な集団内部において使用され、みずからの結束を強めるに役立ち、または、他の世界に対して自己誇示として機能しているかぎりにおいて、その言葉は、通常の「或る集団」の言葉に過ぎない。ところが、他の世界からその「或る特定の集団」の言葉として「らしいもの」として取り扱われるに至ったとき、それは「ナマ」の言葉ではなく「レッテル」としての言葉に変質する。一般的には誇張化され固定化されたものとして、「典型化」が行なわれる。この傾向は言葉だけでなく、奇行にも、風体にも同様に附加されたであろうと考えられる。実在した「奴」に対して、俳諧や歌舞伎に印された「奴もの」は、明らかに「身なり・動作・言語」にわたって、「奴らしく」「典型化」されているものとして、われわれは受け取らなければならないであろう。「奴俳諧」や「奴歌舞伎」が「奴」を題材とし、その風体や奇行を、内容としてもつが故の名称であった場合、その風体や奇行が

実在の「奴」そのものである場合には、やはり「一般受け」しなかったであろう。レアルであるかどうかとか、写実性に富むかどうかといった評価基準が、当時の社会に存したとは思われない。やはり「それらしさ」と「それらしい誇張」「それらしいキマリの型」とが、役者と観客をつなぐ太い絆であったと考えざるをえない。

「奴詞」についても、全く同様に考えるべきであろう。「奴詞」を用いた俳諧が「奴俳諧」だとする従来の考え方も、実のところ、ここに原因があるようである。

「奴」の風体や言行が世上にもてはやされた寛文・延宝頃にあつて、江戸という場所において、日常話された言語の実態は、なかなか捉えがたい。江戸時代前期の此時期は、新興都市であり、政治の中心地としては江戸がその地位を確立し、日々是新たな活気を持っていたことは確かに、種々の記録や日記類・随筆等によって明らかにされている。ただ、文化面においては、上方からの移入に急な時期であつて、いまだに江戸独特のものを生み出してはいないと考えられている。言語の面においても、この文化の面の反映として、出版物や記録類は当然のことながら上方が中心であり、その言語も伝統的な文章語（中古以来培われきたった上方語による文章・擬古文）によるものが圧倒的であつて、江戸という地において語られた日常の言語の実態は、容易には判然としない。一般的には、「江戸語」が成立するのは明和・安永の頃とされる。それは、江戸の街で刊行され、内容が江戸の人士の会話による洒落本の出現をもって最初の資料として考えられているのである。

だが、世の常として、日常会話が文字化されて残るのは、一定の期間おけると考えられ、とくに文章語と会話語との間の差違の甚だしかった時期にあつては、このおくれは著しいと考えざるをえない。江戸語の誕生は通説による明和・安永の頃よりは、やはり遡るのではなからうか。また、それが或る時期に突如成生するものではなく、徐々に実態を備えてくるもので

あることも、また言うをまたない。すでに、室町期のロドリゲス著「日本大文典」⁴⁵に記載される東国方言の様相は、たしかな事実と見ざるをえないであろう。この東国方言は、東国系抄物⁴⁶や「三河物語」などにも見え、後の「江戸語」の源をなすと考えられる。この両者の中間に位置するものとして、寛文・延宝の頃の江戸を舞台とする「奴歌舞伎」や「奴俳諧」やこれらを含む当時の江戸の俗語を考えることは、必しも誤った考えではないであろう。

さて、家康の江戸入府以来、70～90年を経た寛文・延宝の頃、江戸の街における日常語の様相はどのようなものであったであろうか。文化面においては総体として上方からの移入が主流をなし、僅かに江戸で発生したものが、逆に上方に入りこむ傾向も見られる段階であり、出版も漸く江戸で行なわれ盛行を見せ始めている。学者・文化人と言うべき教養人士は、上方語を使用するのが常であったと考えられている。(もちろん、文筆活動の面においては、それが標準語としての地位を保っていたわけである。)政治機構の上で新しく構築された幕藩体制がもたらした言語上の要素としては、多数の家臣を伴った参勤交替の制度である。江戸と国許との交替勤務は、常時江戸の地に全国各地の方言が、ナマの姿のまま持ち込まれることを保持しつづけたのである。この制度は、江戸語や江戸文化の地方伝播に強く影響したのであるが、絶えず流入し続けた全国各地の方言の存在は、全国共通語としての「江戸語」の成立に影響を与えないではおかなかったと考えるべきであろう。また、江戸の街造りに大きな役割りを果たした町人たちは、その過半が上方・近畿一円からの流入であることはよく知られている。この上方町人の言語は、江戸町家の慣習として後々にまで一定の影響を与えている。さらに、上記の武家・町家における雇人たちは、江戸近在或は関東一円の農家の次三男によってまかなわれてきたことは、以前に論述したことがある。⁴⁷「東海道名所記」にみえる下野の下女のことばなども、こ

れを支える有力な材料である。これら関東一円から供給されつづけた武家の奉公人や町家の下男下女たちは、実生活において、江戸の街を構成し、その数において後世への影響力の点からみれば、最大の「江戸語」造成者たちであったと考えてよいのではなかろうか。

以上述べたごとく、上流社会を構成する上方者と各地方武士と、下層庶民を供給した一部の地方下層武士と関東一円の農家出身者という構図は、当時の江戸の言語を考えるに当たっての基本的なものとしてよいであろう。さらに、是に付け加えるならば、漸く太平に慣れるに従って、二代に及ぶ浪人や、新しく取潰された大名の下から排出される浪人たちが、諸国流浪の果てに江戸に流入固着する傾向や、また上方での所謂「喰詰者」が「一旗組」として江戸に流入した傾向が、元禄頃までの特徴ある現象として考えておくべきであろう。筆者は、以前に、此時期の東国語資料を、四つに分類し、「奴俳諧」や「奴歌舞伎」の類は、教養人士の筆になる特殊な意図を以て記されたものであると論述した。⁴⁸その判断は、いまも変らないが、以下、「奴俳諧」に共有されるめぼしいものと、「奴歌舞伎」(六方言葉・評判記)に共有されるめぼしいものをそれぞれに掲げて検討し、これら両者の比較と、さらに「雑兵物語」や「東海道名所記」などに見られるめぼしいものと比較検討してゆきたい。

〔II〕一(2)「奴詞」の実態。

A 「やっこはいかい」に共有されるもの

「清十郎追善やっこはいかい」「ケ庵作 奴俳諧」「集配戒所収 奴俳諧」「浮世歌仙俳諧独吟」「貝おほひ」を資料として、これらに共有される語のうち、俳諧用語として特有のもの例えば、「さしあい」「とんさく」「てんをかく」「つけあい」「かんのんびらき」などを除き、当時の「奴詞」(俗語でもありうるし、東国語でもあった)とおほしきものを次に掲げてみよう。

〔㊤清十郎追善やっこはいかい、㊦はケ庵作奴俳諧、㊧

は集配戒所収 奴俳諧，㊦は浮世歌仙俳諧独吟，㊧は貝おほひの用語の略符号である。数字は語数。]

①、やっこ及び風躰の語彙

やっこ㊦3，小やっこ・町やっこ㊦，公家やっこ㊦，やっこ俳諧㊦，やっこの身㊦，やっこのをとこだて㊦，やっこほどのをとこ立㊦，やっこのかなぼう㊦，をとこだて㊦2，ろっぽうもの㊦2，六法㊦，はりひぢ㊦㊧㊨，ねじりひげ㊦2㊩，

②、特殊な語彙

アあぜ㊦，あに㊦，あんだ㊦㊨㊩，あんちう事か㊦，あんでも㊦，あんとしても㊦，いけぎも㊦，いけ玉しる㊦，ういうい㊦2，うるしい㊦2，えら㊦2㊩3，おもくろい㊦㊧，おやぢ㊦㊧

カかがへげ申㊦，火事の玉子㊦2㊩，きせちなく㊦，きせつなき㊦，きつひや㊦，くわっくわつと㊦，くわんくわつと㊦

サざつつの坊㊦，しやつつら㊦㊨㊩，しやばけたる㊦，しんきやもんき㊦，すっぱらぬく㊦，すべたな㊦，づくにう㊦2㊩

タちくと㊦，地こぶ㊦3㊩，ちぼへる㊦，ちぼゆる㊦㊩，血目玉㊦2，ちよいちよい㊦2㊧，てくらはね㊦，でっかい㊦，どうなか㊦，どう腹㊦，とち狂ふ㊦，

ナなじり申㊦，なだ㊦3，なま至り㊦㊩3，ハばたら㊦

ひからめき㊦，ひっからと㊦，ひよらひよんと㊦，ほへた㊦，ほへだす㊦，ほざく㊦2，ほざげだいたる㊦，星の親ぢ㊦3㊩，ほゆる㊦，ほぢやく㊦2，ほぜる㊦，ままんはち㊦㊩，むしむし㊦，めったやたらに㊦2㊩，ヤやたらに㊦，やだやだ㊦，ゆってたべけ㊦，ワわっちめら㊦2㊩2，

③ 強調の接頭辞をとる語彙

ウッ うったり申さない㊦，うっちやりし㊦，うっぽり㊦，うっぽれ㊦，ウン うんのめ㊦2，オッ おつちなへ㊦，カッ かつつきて㊦，かつばらひ㊦2，かっぱれ㊦2，カン かんなく㊦，かんなくる㊦，クン くんのみ㊦㊨㊩㊧，サッ さつかけ㊦，ツッ つつさかふ㊦，つつさす㊦，つつ立つ㊦，つつとをせ㊦，つつとべり㊦，ツン つんなをれ㊦，つん残れ㊦，トッ とつちめて㊦，とつつかれた㊦，とつづく㊦，ノッ のちちめた㊦，ヒッ 引きかき㊦，ひつかきつゝる㊦，ひつかけられ㊦，ひつかむ㊦，ひつさかふ㊦，ひつしめない㊦，ひつそ引来る㊦，ひつたくれれば㊦，ひつたたす㊦，ひつ契る㊦，ひつちがいつけに㊦，ひつちみて㊦，ひつつかんで㊦，ひつつけ㊦2，ひつはなされて㊦，ひつぱり㊦，ひつびけ㊦，ヒン ひんなじり㊦，ひんなぢる㊦，ひんなすつて㊦，ひんなづり㊦，ひんぬき㊦，ブッ ぶつきれる㊦，ぶつこはし㊦，フン ふんごんだ㊦，ふんぞって㊦，ブン ぶんだす㊦，ぶんでる㊦，ぶんのぼせ㊦，ぶんのりて㊦，ぶんまかせ㊦，ぶんまき㊦，ぶん向居て㊦，

④ 促音撥音の挿入される語彙

ツいしつこく㊦，さむつこき㊦，さらぬつちや㊦，すつこき㊦，ちっくり㊦，ぬるつこき㊦3，むしつこし㊦2，ひつちばへ㊦，ひやつこき㊦，ンたんだ今㊦，つんもる㊦，こんだ㊦㊧

⑤ 助詞・助動詞・語尾の特殊なもの、

サ、都さも㊦，申せさ㊦，見申さ㊦，やつさ㊦，チヤ、おくりやれちや㊦，かけたちや㊦，さつ

ちや㊦さらぬちや㊧, したてだちや㊧,
モサ, ㊧6, ㊧4,
一口, 明ろ㊧, あけろ㊧, おけろ㊧㊨, おった
てろ㊧, とをしろ㊧, なさろ㊧㊩3,
ベイ, 有べいけれど㊧, あんべいな㊧㊩2㊧, う
るべい㊧, いざすべい㊧, くんのんべい㊧,
ごさんべい㊧, すべい㊩, だんべい㊧㊩2,
吹べい㊩, よかんべい㊧,

B 「六方ことば」に共有されるもの

延宝六年刊「六方こと葉」(正本屋十右衛門),
「用捨箱」所収の「いとなみ六ほう」「よし原六
方」や「武江年表」にある山中源左衛門の辞世,
また「歌舞伎評判記」(巻一)を資料として, 歌
舞伎世界に見られるめぼしいものを挙げてみよ
う。もっとも「あほうがた」「一まいかんばん」
「おち」「おどりふり」「かごぬけ」「花車形」「ぐ
わち」「器用はだ」「きんひら」「くりびん」「さ
んさ」「かぶき子」「口せき」「しうたん」「しぐ
み」「仕出し」「じつごと」「すみかつら」「立役」
「てき役」「どうけ」「ならく」「ぬれごと」「の
ふがかり」「ふり出し」「やつし」「やつちや」「や
らうぼうし」「れんとび」「若衆形」などの歌舞
伎界特有の語は省略する。〔㊧は六方こと葉, ㊨は用
捨箱, ㊩は歌舞伎評判記の用語の略符号。数字は語数。〕

① やっこ及び風躰の語彙

お江戸の六はう㊧, しゆらのやっこ㊨, たん
ぜんやっこ㊧, にせやっこ㊨, ばんどうご
ゑになまりをくれ㊨, やっこ㊧, やっこの長
かたな㊧, やっころさ㊧, やっとこさ㊧, 六
はうことば㊨,

② 特殊な語彙

アあんだ㊧㊩2, あんと㊨
かかたじうけない㊧㊩5㊨,
くだ㊨,
サさごじゆ㊨, さんさ㊨,
づんと㊨,
タちよいちよい㊨,
でつかい㊨㊩2
ナなだ㊧㊩2㊨, なんだ㊨㊩

ハほてつばら㊨

マまんばち㊨

ヤよいかく㊨3,

ワわざくれ㊧, わっちめ㊧, わんざくれ㊨, わ
んざくれぶし㊨,

③ 強調の接頭辞をとる語彙

オッ おつとりまはして㊨

オン おんまけ㊧,

カッ かつかじる㊨, かつついた㊨,

クン くんめ㊧,

サッ さつかけ㊨,

サン さんだせ㊨

ツン つんだいた㊧, つんでた㊨3, つんなげ
た㊨, つんなす㊨, つんなって㊨, つんの
めるべいが㊨

トッ とつつかれて㊨

ヒッ ひっかけ㊨, ひつくみ㊨, ひつさげ㊨,

ヒン ひんのせ㊨, ひんまいたる㊨,

ブッ ぶっかく㊨㊩㊨, ぶつくだき㊨, ぶっちら
した㊨2, ぶつつける㊨,

④ 促音撥音の挿入される語彙

ツ つかいな㊧, はなれまらって㊨, まっ
ただなか㊨, 見つたくない㊧㊩2, やりまつし
よ㊧,

ン わんざくれ㊨2, わんずかばかり㊨, こん
だ㊨12㊧㊨2, こんじや㊨4,

⑤ 助詞・助動詞・語尾の特殊なもの

サ あんとすべいさ㊧, これさ㊨

モサ ㊨1㊧1,

一口 まいろ㊨

ベイ あんべけれども㊧, かつかじるべい㊨,
すさるべい㊧, すべい㊧, だんべい㊧,
つんぬめるべい㊨, ふんばるべい㊨,

ゾナ 有ぞは㊨7, こんだぞな㊨6, だぞな㊨,
ましたぞな㊨, ゆったぞな㊨,

以上、二種の語群を、5つの項目ごとに比較
してみると、①はさておき、②で合致するもの
は、「あんだ」「でつかい」「ちよいちよい」「な
だ」「まんはち」「わっちめ」に過ぎない。Aに
多い「ちめ玉」「地こぶ」「ほざく」「星の親ち」

などはBになく、Bに多い「かたじうけない」「くだ」がAに見られない。③においても合致するのは「かつつく」「くんのむ」「さつかけ」「とつづく」「ひつかけ」の5語にすぎない。AにあってBにない現象は、ウッ、ウン、カン、ツッ、ノッ、フン、ブンの多きにのぼり、一方BにあってAにない現象も、オン、サン二種である。④については合致する語は「こんだ」のみであるが、これもAではただ2例に対しBでは18例にのぼる。⑤においては、「べい」と「さ」は同じような現象を見せる。命令形の「ろ」と「もさ」はBに少いのが目立つ。さらに、Aにおける「ちや」とBにおける「ぞな」は対照的である。A群とB群とは、そこに用いた資料の語数総量に大差はない。やはりここに現われた差違は、両種の位相の差と見て差支えあるまい。A・B両群が、ともに芸能分野に属し、教養人士の手になる「らしき」奴詞が用いられていると見ることができよう。そこで、当時の俗語の一部(底辺の大部分を占めると考えられる)を成す「雑兵物語」と「東海道名所記」の下野下女の言葉をとりあげ、(Cとしょう)A・B両群のものと比較してみようと思う。紙数の都合もあり、この分野は一覧を避けるが、先に掲げたA・B二群に加えた5分類のうち、③と⑤について比べてみよう。③ではA・Bいずれかに存しながらCにないのは、ウン、オン、カン、サッ、サン、であり、Cに存してA・Bに見えないものは、カキ、ブチである。このCにのみ存するものは、他のものが促音・撥音の接頭辞であるのに比して異質である。⑤では、Cでは「べい」が多く、命令形の「ろ」も多い。この点ではA群に近い。しかし、「もさ」は見えず「ちや」も存しない。B群との間では、「こんだ」はCにも多く類似するが、「ぞな」は見えない。

おわりに

一般的には、「奴詞」と「六法言葉」は同義とみられ、いくつかの特殊な語彙を指しているよ

うである。しかし、これまで見て来たところでは、この両者は必ずしも同義でなく、相当に大きなへだたりを有しているようである。いまのところは、残念ながら、「奴詞」がどのようなものを差すか、その実態を明らかにすることはできない。世上の常識は「奴俳諧」にやや強く惹かれ過ぎていようであるが、はたしてそれでよいであろうか。まず、A・B・C群はいずれも、当時の俗語であり、それらの若干は流行語でもあったであろうと考えられる。やはり、なお一層の確実な資料によって、その実態を明らかにしなければならないと考えられる。

〔附記、所論はすべて深井によるものであるが、用いた資料の大半は中林が用意したものであることによって、連名とした。〕

- 註1. 小学館 日本国語大辞典の「やっこはいかい」の項の解説。
- 註2. 明治書院 俳諧大辞典の「やっこはいかい」の項の解説。
- 註3. 珍書保存会の複製本を用いた。他に、芳賀矢一藤村作監修 荻原羅月校訂 大正十五年一月二十日 紅玉堂出版の活字本、及び古典俳文学大系 貞門俳諧集一 中村俊定森川昭校注本を参照
- 註4. 天理図書館 綿屋文庫蔵本による。立圃自筆一帖。
- 註5. 天理図書館 綿屋文庫蔵本による。註3の本と大体同内容であるが、頭部を欠き他にも句の出入など異同があり、或は原本が違ったものかとも考えられる。荻野清の「俳諧と時代風俗——やっこ俳諧考——」に活字翻刻されている。
- 註6. 天理図書館 綿屋文庫蔵本による。末尾の書簡は宗因筆である。森川昭の「奴俳諧と半井ト養」(成蹊論叢創刊号)に活字翻刻されている。
- 註7. 天理図書館 綿屋文庫蔵本による。これも註6に記した森川昭の論文に翻刻されている。
- 註8. 咄本「百物語」上:24に「やっこはいかいとて人のしけるを聞きしに……」とみえる。また、後に述べる歌舞伎界における動向などからも推察できるところである。
- 註9. 註2と同書による。
- 註10. 位相語という概念については菊沢季生の研究に始まる。

- 註11. 小学館 日本国語大辞典による。
- 註12. 明暦三年(1657), 水野十郎左エ門と幡随院長兵衛の事件があり, また, 江戸の医師南竹(加藤玄悦)著の「我衣」(「燕石十種」第一巻所収本による)に「正保・慶安の頃(1644~1651)……男達と云事はつかうせり。」の記事がある。
- 註13. 「慶長日件録」にみる現制。「駿府記」にみる徒党禁止。現代のものでは, 南和男著「江戸っ子の世界」(講談社現代新書)や, 三上参次著「江戸時代史三」(講談社学術文庫)などによる。
- 註14. 万治二年刊, 二巻二冊。「近世文芸叢書六」所収本による。
- 註15. 「八十翁昔話」とも言う。享保十七年。二巻二冊。「百万塔」「日本随筆大成二期二」による。天保八年刊本金沢市立図書館稼堂文庫参照。
- 註16. 註12に記したと同じ。
- 註17. 萩野 清著「俳諧と時代風俗」による。
- 註18. 「江戸名所図会」巻一の「丹前風呂」の記載や, 金沢康隆著「江戸服飾史」などの記述に見られる。
- 註19. 註20. 註17に同じ。
- 註21. 斯道文庫編, 井上書房刊。昭和37年12月から昭和39年4月まで, 三冊と索引一冊。「斯道文庫書誌叢書之一」として出版。
- 註22. 題名が經典に擬せられたものであるという萩野説(註17と同書)は首肯できる。なお「奴俳諧歌仙」は序とともに同書に翻刻されている。なお「成蹊論叢」(創刊号)に森川昭「奴俳諧と半井ト養」と題する論文において解説している。
- 註23. 註22に掲げた萩野・森川の同上論文に解説があり, 翻刻がなされている。
- 註24. 「成蹊論叢」創刊号の森川昭の論文「奴俳諧と半井ト養」による。
- 註25. 大正六年, 珍書保存会刊の複製本による。註3参照。
- 註26. 註3註5参照。本文で用いた数字は〔三〕のテキストに付した句の通し番号である。
- 註27. 註6, 参照。
- 註28. 種彦の「足薪翁記」に次の内容が収められている。
- 『○ひつひけさねを三味線のいとさくら
三味線に糸桜をひつかけて ねしめをかき出す
やうな句作り さてもおてぶしはきいたりな云々
○しこみぬる酒のかはるはういこんだ
男だての気がひくわう まん八がすぎだと見えた
○奇麗にもみがく茶碗ぞぶつくな
○竹にとつつくいなかたつぶり
○れんじよりそ首はちよつと見えけらし
○初塩にひつつりあげし魚にげて
○川狩の勢ひあたこそおもくろい
○壁のすきまに月はてつから
○うはさばなしに光をくれの月だんべい
○よござんせうよ園碁のなぐさみ
以上知算が独吟百韻のうちよりえりだしなり。』
- 註29. 註24参照。
- 註30. 元禄十六年刊。歌謡集成本による。
- 註31. 宝永七年刊。歌謡集成本による。
- 註32. 「歌舞伎年表」第一巻の記事による。
- 註33. 石川県図書館協会による出版「三壺聞書」による。
- 註34. 註32に同じ。
- 註35. 「アイヤわら(竹之丞)相手(八郎右衛門)辨慶の物語, 兩人にてする。役者大形出づ。三郎右衛門不出」と説明あり。
- 註36. 「(役者不残)茶屋かゝ(主膳), 奴(鎌倉団右衛門主膳いとこ), 猿若(竹之丞)」と説明あり。
- 註37. 入間川(奴, 大名の子, 親, 入間某, 召使), 花段落文(奴, 若衆,)の登場人物である。
- 註38. 「夢の盃」では内記が名所言立。若六方, 若衆が登場する。
- 註39~44. 「歌舞伎評判記集成」(岩波書店刊)第一巻所収のものによる。
- 註45. ロドリゲス「日本大文典」の「関東又は坂東」の頃。土井忠生訳, 三省堂刊。
- 註46. 「天南代抄」「妙統大師語録抄」「大潤代抄」「巨海代抄」「本則抄」など。
- 註47・48. 「雑兵物語 研究と総索引」(武蔵野書院昭和48年, 3月)拙著。研究篇572頁。